

III 国際交流ラウンジ・国際交流ボランティア

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学国際連携推進機構 公開日: 2024-02-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 熊井, 浩子, 濤岡, 優, 徐, 真真 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/0002000212

Ⅲ 国際交流ラウンジ・国際交流ボランティア

熊井 浩子／濤岡 優／徐 真真

これまで浜松キャンパスではラウンジ専属の部屋がなかったため活動に大きな制約があったが、令和3年度末に教員居室や日本語教室と同じ建物に専用の国際交流ラウンジが整備された。併せて、令和3年度9月より静岡キャンパス、浜松キャンパスに1名ずつ配置された学術研究員が中心となってラウンジ運営を担う体制ができたことで、本年度ラウンジは大きな飛躍を遂げたと言えよう。

【令和4年度の主な活動】

[定例]

●English Lounge

英語ネイティブ教員のファシリテートのもと各回のテーマに沿ってアットホームな雰囲気の中、会話やディスカッションが楽しめる。オンラインで静岡・浜松をつないで実施。後期からはレベル差、話しやすさ等に配慮して、木曜日は個別レッスンも取り入れた。

開催日時：前期：月曜授業・水曜授業のある12:00～14:00
後期：月曜授業・木曜授業のある12:00～14:00

[静岡キャンパス] (濤岡)

静岡キャンパスでは、現在大きく分けて5つの活動・プログラムを展開している。具体的には、1.英語学習サポート、2.留学・派遣サポート、3.交流イベント、4.国際教育プログラム、5.学生コミュニティである。以下では、それぞれの領域の取り組みを紹介しつつ、最後に今後の活動の展望を簡潔に提示する。

まず、「英語学習サポート」としては、学生たちが気軽に日常会話英語を使える場として「Afternoon chatting」を週に1回開催している。このプログラムの狙いは、英語でのコミュニケーションに自信のない学生たちが英語を話すことへの不安や恐怖心を払拭する機会の提供であり、ボードゲームや英語のドラマなどを取り入れつつ、日本語も織り交ぜながら実施している。

「留学・派遣サポート」では、国際課の職員が定期的に留学の個別相談にのる「留学サロン(月1回)」、留学を希望する学生たちが集まり、お互いに情報交換するコミュニティとしての「留学びあ(月2回)」の2つを展開している。留学びあでは、留学に関心がありつつも、どのように準備を進めたらよいかわからない、どこの国に留学したいのかわからない、といった初歩的なことに悩む学生が多く参加している。また、留学について話ができる人が身近にいないといった学生からの声もあり、留学のモチベーション維持や仲間づくりの場としても機能している。

「交流イベント」では、静岡大学の教員で留学や海外での研究等の国際経験がある先生をゲストに招き、体験談を聞きつつ学生・教職員全体で交流するネットワーキングイベント

としての「静大国際アカデミー：私の国際体験（年4回）」、また、地域で活躍する方や団体を招き、国際的なテーマについてワークショップ等を行う特別イベントも不定期に行っている。特別イベントの具体例としては、障害をユニークなアートとして取り入れながらデザイン活動を行うHAHAHA.LABOさんとコラボし、作品展示やトークイベントを行った「AHAHANOLABOのハハハノハコ展」や、静岡を拠点に世界規模で芸術活動を展開する公立文化事業集団SPACとコラボし、演劇や作品を通して国際交流について考え体験する「世界で活躍する静岡県の公立劇場SPACってどんなところ？」をあげることができる。

最後に、学生スタッフが学生同士のための交流機会として企画するイベントも月2-4回開催しており、昨年は世界各国のお菓子をもち寄る「世界のお菓子パーティ」や、日本の季節の行事七夕を楽しむ七夕イベント、クリスマスパーティなどを行った。さらに、留学生が主催するイベントもいくつか催され、「恋」をテーマに日本、中国、韓国の書道の違いを体験する「日中韩書道ラウンジ」や、英語と中国語の詩を朗読しながら音や発音、リズムの違いを楽しむ「英詩・漢詩と出会う」といったイベントが実施された。

「国際教育プログラム」としては、本学教育学部と共同で、フィンランド・オウル大学との連携国際共修プログラムを2つ実施した。1つは、令和4年8月に実施した2日間でのオンラインプログラム、もう1つは、令和5年3月に実施したフィンランド・オウル大学、および横浜国立大学の3つの大学で共同実施した1週間のオンラインプログラムである。夏のプログラムには、静岡・浜松の両キャンパス合わせて28名の学生が参加し、フィンランドの教育・福祉システム及び教師教育をテーマにした講義をうけたのち、グループでディスカッションを行った。また最後のセッションでは、日本での教育における今後の課題や可能性について、ディスカッションを経て得られた学びを、グループごとに発表し意見交換を行った。一方春のプログラムでは、静岡大学から15名の学生が参加し、5日間にわたるプログラムを通して、フィンランドをはじめとするヨーロッパの教育システムをモデルに、平等と公平、さらに幸福概念や幸福を図る尺度の妥当性についてディスカッションを展開した。特に春期ではオウル市にある高校の生徒にも参加してもらうセッションを設け、学生同士で多様な観点から意見交換をする機会提供が可能になった。

「学生コミュニティ」は、「静大バディ」、および学生サポーター育成の場としての「ラウンジボランティア」の2つを軸に展開している。静大バディは、2021年の12月から開始したものであり、愛知県高浜市の 트레이ディングケアが実施するバディシステムがモデルとなっている。具体的には、同じ専門や学科、あるいは同じ関心や趣味をもつ留学生と日本人学生がペアやグループを組み、それぞれで自由に活動し交流するコミュニティとなっている。静大バディは、留学生への一方的な支援を目的とした「チューター」とは異なる取り組みとして位置づけており、横並びの関係、かつ小規模での交流や相互的なサポートを目的とするものである。静大バディの運営担う学生スタッフ（3名）も育成しており、ペア・グループの組み合わせ決めや、各バディの調整、相談役を担っている。そのほかにも、バディ同士が交流できる機会としてのイベントの実施や、上述した留学生が主催・企画するイベント開催のサポートなども担当する。

一方ラウンジボランティアは、国際交流や多文化交流に関心のある学生コミュニティであり、ラウンジに初めてきた学生の案内や対応、交流イベントの企画・実施といった活動

を行っている。ボランティア立ち上げの経緯としては、昨年10月からイベント・プログラム時以外にも、ラウンジを常時開放し、学生が自由に交流できる場とするにあたって、常駐する学生が必要となった。そこで、ボランティアとして学生の協力を募ったが意欲的な学生の参加が多く、2022年度後期の段階では19名が活動しており、イベントの開催やラウンジの環境整備などにも意欲的に取り組んでいる。

年度末には学生スタッフと学生サポーター合同のワークショップ研修を行い、グローバルな視点をもちつつ、学内・地域での国際交流分野で活躍する人材としての育成を図った。研修では、 트레이ディングケアの代表、新美純子さんに講師を依頼し、学生たちが多文化共生や異文化交流に対する理解を深めつつ、今後ラウンジを拠点にどのようにして学内や地域の国際交流を促進することができるのか、そのために自分たちの関心や特技をどのように活かせるのか、自由にアイデアを出し、アドバイスしあう機会となった。

そのほか、スタッフ・サポーターの学生だけではなく、ラウンジを利用する学生たちが静岡市主催「多文化交流スクエア」に参加し、地域住民向けにアジア諸国の生き方や生活、遊びの紹介を行ったり、高校生向けの多文化交流イベントを企画したり、といった主体的・自主的な活動も行われた。

次年度は、これまでの取り組みの定着・安定化を図りつつ、新規のプログラムや企画をたちあげ、ラウンジの活動をさらに多様化・発展させていく予定である。特に、ラウンジの中で、日本人学生が留学生のもつアルバイトの悩みや日本語学習へのアドバイス・サポートを行っている場面が徐々に見られるようになった。したがって、次年度からはボランティアの学生の協力を得ながらラウンジの取り組みとして体制を整え、日本での生活や学業、課外活動等に関して悩む学生に対するぴあサポートを展開していきたい。また、静岡キャンパスのラウンジを展開する要となりつつある学生スタッフ・サポーターの育成にもさらに力を入れ、研修等の実施により学生たちのスキルアップの機会を充実させていきたいと考える。

[浜松キャンパス] (徐)

浜松キャンパスでは、令和4年度4月に、工学部7号館108室を使用して、国際交流ラウンジをオープンした。オープン以来、平日の午前9時から午後5時まで常時開室しており、イベントなどの予定がない時間帯に、学生たちが自由に利用することができる。ラウンジでランチを食べたり、歓談したり、時には勉強したりする学生たちの姿がよく見受けられ、学生たちの居場所の一つとして、着実に定着しつつある。

浜松キャンパス国際交流ラウンジで行われている活動・プログラムは、①国際交流イベント、②留学生への生活・学習サポート、③留学生による英語学習サポート、④学内授業とのコラボレーション、の4つに大別される。以下では、それぞれの取り組みを紹介していく。

まず、①「国際交流イベント」については、定期的なイベントと単発のイベントの2種類を開催している。定期的なイベントは、国際交流ラウンジの場所が固定されていない時期から、続けられてきたものであり、学期中に毎週木曜日の午後に行われている。国際交流活動に関心のある学生（留学生・日本人学生）が積極的にイベントの企画運営に関わり、

主体性・自主性を発揮できる活動である。具体的には、趣味や恋愛、食文化など学生たちが自ら選んだトピックについて話し合うというトークイベントや、トリビアゲームやロールプレイなどといったゲームイベントがある。さらに、“Countries of the World”というシリーズ企画で、留学生たちが出身国・地域の歴史や文化、言語などを紹介したり、海外留学から帰ってきた学生が留学先の国での体験を共有したりする場も設けている。これまでは、ミャンマー、台湾、モンゴル、韓国、香港、スリランカ、ラトビア、ウクライナ、ドイツなどが紹介されてきた。令和4年度、このような定期的なイベントへの参加者数は、平均して毎回20人以上である。また、単発のイベントとしては、大学の体育館で行われるスポーツイベント、クリスマスパーティー、留学生送別会などがある。こうした単発のイベントの参加者数は、平均して毎回30人以上となっている。これらのイベントの多くは、使用言語を英語や日本語に限定しておらず、好きな言語で自由に交流できる。日本人学生と留学生の交流を深めるとともに、学生の語学力や異文化理解力を高める場ともなっていると言える。

次に、②「留学生への生活・学習サポート」としては、令和3年度の6月からスタートした「日本語サポートデスク」が挙げられる。これは、日本語学習や大学生活で困っている留学生を、日本人学生や留学生の先輩がサポートするという取り組みである。日本語サポートデスクは、学期中に週2～3回、毎回2時間・サポーター2人という体制で実施している。学生サポーターには謝金が支払われている。これまでは、日本語会話の練習や、日本語で書かれている書類の意味の説明、レポートの日本語添削、勉強や生活の相談など留学生の多様なニーズに対応してきた。留学生にとっては、サポーターが同じ学生同士であるため気軽に相談でき、さらに日本語を含めて勉強や生活にまたがるサポートを受けることができる。しかし、こうした学生同士のピアサポートは、単に留学生が「支援」を受けられるにとどまらず、サポートする側の学生にとっても多くの学びが得られる。サポーターの学生にとっては、留学生と交流できる機会として、外国語の練習やコミュニケーション能力の向上など、留学のきっかけともなることが期待できる。

さらに、③「留学生による英語学習サポート」では、令和4年度の4月より「英会話with留学生“Chill & Chat”」を週に1回、毎回2時間実施している。この企画では、英語が堪能な留学生と一緒に、英語でゲームやカジュアルな会話を行い、楽しみながら英語力をアップすることを目的としている。担当の留学生には、スタッフとして、謝金が支払われている。この企画を始める契機となったのは、「英語ネイティブの先生による英会話レッスンは敷居が高く、参加するのが怖い。先生ではなく留学生が英会話をやるなら、もっと気軽に参加して話せそう」という学生の声であった。教員による英語の授業とは異なり、留学生が進行役を務めることで、リラックスした雰囲気の中で英語力を鍛えることができる。参加者がプレッシャーを感じずに英語を使えるため、もともと英会話に自信のなかった学生でも参加しやすくなった。実際に、この企画が始まって以来、参加者数は平均して毎回12人となり、人気を集めている。学生たちが楽しみながら英語力を向上させる機会を得ることができ、自信の醸成にもつながると考えられる。

最後に、④「学内授業とのコラボレーション」としては、前期に「ESP I (留学)」(安富勇希先生)、後期に「日本語VI」(袴田麻里先生)とコラボ企画を実施している。前期の

「ESP I（留学）」では、受講生が企画した国際交流イベントに協力し、後期の「日本語VI」では受講生が企画したイベントや授業でのディスカッションへの協力及び参加をすることで、学内の授業とのつながりができた。

浜松キャンパスの国際交流ラウンジは、オープン以来、国際連携推進機構のホームページのほかに、Instagram, Facebook, Twitter, LINEなどのソーシャルメディアを活かして、活動の様子を発信してきた。そのため、学内外での認知度が高まりつつある。しかし、まだ、国際交流ラウンジの存在を知らない学生や、利用したことがない学生もいる。このような学生にも情報を届け、さらにラウンジの活動に興味を持ってもらうために、広報の方法の工夫や活動の内容の再検討が必要になってくると考える。また、ラウンジ活動の一翼を担う学生スタッフやボランティアの確保と育成が課題として挙げられる。今後は、これらの課題に取り組みながら、これまでの活動を見直しつつ、さらに新たな企画・プログラムを試みたいと考える。

このように、コロナ禍という制約は続いたが、令和4年度には両キャンパスともに学生主体の活動が盛んになり、活動も多様化したことが大きな成果であると言える。